

37号

# 愛鳥教育

1991.6

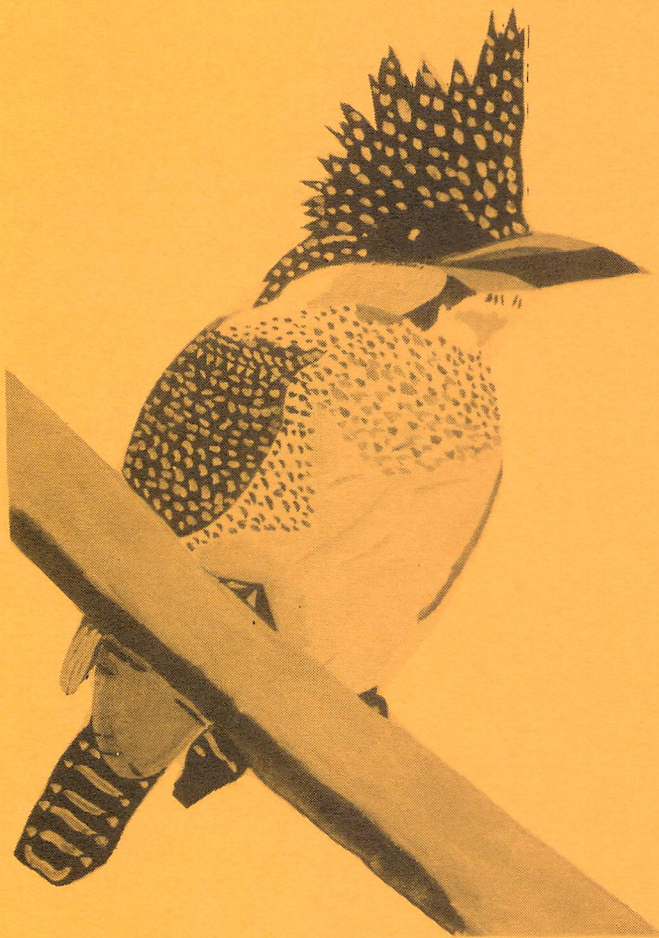


全国愛鳥教育研究会



## 目次

巻頭言-----	江袋島吉	3
全国愛鳥教育研究会総会報告-----	平田寛重	4
実践報告		
「環境教育を意識した遠足のモデルプラン ー東京港野鳥公園をフィールドとしてー」 -----	堤 達俊	8
野鳥公園に思う-----	平田寛重	11
全国愛鳥教育研究会総会に参加して -----	原 一成	12
むらの理科ことはじめ(10) 「キマムシがいた」-----	金井郁夫	13
愛鳥活動実践講座 「ファースト・レッスン ツバメ・ウォッチング」 -----	島田利子	14
論説		
「愛鳥教育がめざすもの」-----	平田寛重	18
愛鳥活動のヒント 「OHPを使ったぬりえの指導」	平田寛重	20
各地の話題 「神奈川県愛鳥モデル校指導者研修会 に参加して」 -----	谷 淳司	22
-----	小山ひより	22
インフォメーション		
関連団体・雑誌-----	杉浦嘉雄	23
BOOKS & VIDEO-----	平田寛重	24
夏期研修会のお知らせ-----		25
表紙の紹介		
うれしい春-----	小泉和江	26
事務局日誌-----	岡本嶺子	26
『愛鳥教育』バックナンバーの紹介-----		26
編集後記-----	平田寛重 岡本嶺子 杉田優児	27
愛鳥クイズ-----		28



秦野市立北小学校4年 小泉 夏木

# ウトナイ湖が危い

全国愛鳥教育研究会会長 江袋 島吉

### ◇夏季研修会に寄せて

ウトナイ湖は日本第1号のバード・サンクチュアリ（昭和56・5）で、天然記念物の野鳥たちが大挙飛来する場所として、また、渡り鳥の重要な中継地点であることは、周知のとおりです。

この“野鳥の聖地”が、開発計画の下にさらされていることは、薄々承知はしていましたが、某誌に連載された立松和平氏の告発レポート“野鳥の聖地・ウトナイ湖を守れ”の一文に接した時は新たな驚きを覚えました。

レポートによると、昭和40年代の工業開発ブームのなかで、北海道開発庁によって進められた苫小牧東部の勇払原野に、巨大コンビナート（苫東）を建設しようとした計画が、オイルショックなどの影響で、進出する企業はほとんど無く、いまだに93%が空き地になっているそうです。

ところが、肝心の苫東計画が失敗したのに、工業用水を供給するための、二風谷（ニフタニ、大森林の意）ダム建設計画だけが残り、洪水防止、発電、農業用水などの多目的ダムとして目的を変え、既に大規模な工事が始まっているようです。

このダムが完成すると、日本に残された数少ない清流の沙流川は姿を消し、しかも、アイヌ民族の心である集落が、水に沈むとのことでした。

一方、勇払原野の西部を流れる勇払川には、ウトナイ湖の水が注いでいますが、ウトナイ湖の水の80%は美々川から流れ込んでいます。

“苫東”のある苫小牧一帯では、国家プロジェクトが妖怪のように存在し続け、次々と衣裳を変えては立ち現われ、現在憂慮されているのは、開発庁による千歳川放水路計画で、計画が実現すると、ウトナイ湖の水は、枯渇の運命にあります。

美々川の水源の一つは、千歳空港から車で5分ほどの千歳湖で、このあたりも既に、ゴルフ場建設を含めた、大リゾート計画が進められています。

美々川のもう一つの源流点は、千歳湖の東北にあたる、ほど近い所がありますが、こちらは、地中からきれいな水が、こんこんと湧き出して、水量豊かな一大水源となっています。

問題はここにあって、昭和59年に開発庁は、石狩川洪水対策工事の一環として、千歳川の間地点から、大放水路を掘り込む千歳川放水路計画を発表しました。

このルート上には、美々川の源流部があるため、地下水の分断による湖の枯渇や、生態系への影響が心配されています。現在は一刻も早く環境アセスメントを取り付けたい道開発局側と、計画に反対する自然保護団体、苫小牧市、農民団体などとの間に、深刻な対立が続いているとのことでした。

このあたりを、名調和平節で語ってもらおう。「千歳川放水路計画は、日本海に注ぐ千歳川の流れを、洪水を防ぐために、180度変えて太平洋に持って来ようというのである。莫大な費用をかけて、自然をここまでいじる必要があるのかと、素朴な疑問がわいて来るのを、私は禁じ得ない。

千歳川放水路ができると、この流域にあるウトナイ湖が重要な影響を受ける。これまで、250種以上の野鳥が確認されたというウトナイ湖には、野鳥が住める自然環境が残っているということだ。

チーフレンジャーの大畑孝二氏は、語気を強めてこう語る。『放水路はウトナイ湖を作っている美々川の源流部を通ります。川の源流は湧き出る水です。低い所が堀削され、地下水が大きく放水路に引っ張られます。地下水がなくなれば湿原は乾きます。植生が変わって、昆虫相も鳥相も変わります。貴重な自然環境が変貌することは間違いありません。』ウトナイ湖サンクチュアリの存在自体が、危ぶまれているというのだ……。」

私はウトナイ湖の危機的状況が、これ程切迫したものとは知りませんでした。たまたま今夏の研修会が、同地で行われますので、その際に、じっくりとこの目で確かめたいと考えています。

なお本研修会は、会の活性化を目指した新機軸の一環ですので、同憂同好の会員各位が、多数ご参加の上、ウトナイ湖の自然とその背後事情について、十分にお究めいただきたいものと存じます。



# 平成3年度 全国愛鳥教育研究会総会報告

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

## はじめに

今年度から、年度当初に総会を持つこととし、今回は、5月18日(13:00~16:30)、東京港野鳥公園(東京都大田区大井)を会場に開催しました。神奈川県横浜市立市ヶ尾小学校の堤達俊先生より「東京港野鳥公園を利用した遠足による愛鳥教育のプログラム化」ということでモデルプランを発表していただきました。総会後は、ネイチャーセンターなどの施設見学や観察小屋からの野鳥観察を行い、充実した時を過ごしました。参加人員は10数名でしたが、遠く滋賀県から中嶋先生のご参加もあり、有意義な会になりました。

## I.<総合プログラム>

- 1 会長挨拶
- 2 1990年度事業報告
- 3 1990年度決算報告
- 4 1991年度事業計画
- 5 役員選出
- 6 副会長挨拶
- 7 発表

司会 島田利子  
江袋島吉  
長屋昌治  
岡本嶺子  
平田寛重  
平田寛重  
金井郁夫

「東京港野鳥公園における  
学校遠足の愛鳥教育のプログラム化」

横浜市立市ヶ尾小学校 堤 達俊

- 8 野鳥公園の見学と探鳥会

以上、2~5については、長屋、岡本、平田各常務理事より順次報告・提案がなされ、了承されました。また、徳竹監事には監査報告をお願いしました。



今回の総会では、北海道支部との共催による夏期研修会の開催と「愛鳥教育」の誌面刷新・季刊化を今年度事業のメインとすることが了承されました。また、事務局の会員管理方法の不備や会費徴収が遅れている事実が問題として取り上げられました。今後、会員(会費)管理について徹底を図っていく予定です。



## II.1990年度事業報告

長屋常務理事より〔資料1〕に基づいて、1990年度の事業報告がなされました。

〔資料1〕 1990年度事業報告

### 1. 「愛鳥教育」の発行について

- (1) 34号(9月)、35号(12月)、36号(3月)の発行。

### (2) 内容

- ① RSPB「リーダー用ガイド」から、「野鳥の行動」「野鳥保護と保全」等を掲載した。
- ② 「学校現場へ愛鳥教育を」「野鳥との出会いをつくる巣箱活動」等の愛鳥教育実践講座を掲載した。
- ③ 野鳥保護も含めた環境教育に関する情報の掲載をした。



## 2. 総会について

期日：1990年8月7日（火）

場所：(財)山階鳥類研究所

- 内容：① 1989年度事業報告  
② 1989年度決算報告  
③ 1990年度事業計画  
④ その他

総会終了後「我孫子市立鳥の博物館」を見学。

## 3. 研修会

- (1) 野外研修会 1990年12月2日（日）  
内容：葛西臨海公園見学と冬鳥ウォッチング  
参加：6名  
見られた鳥：17種  
報告：「愛鳥教育No.35」

- (2) 室内研修会 1991年1月27日（日）  
場所：世田谷区立教育センター  
内容：行政、民間の自然保護団体と学校における愛鳥教育の取り組み方及び指導方法等に関する発表  
参加：38名  
報告：「愛鳥教育No.36」

## 4. 愛鳥教育の国際交流

- (1) 日中愛鳥教育交流 1990年5月8日～17日  
内容：中国江蘇省野生動物保護協会の一行5名来日。  
世田谷区立松が丘小学校視察。  
野鳥保護のつどい石川大会での「愛鳥教育交流会議」に参加。  
報告：日本鳥類保護連盟の報告書

- (2) 日・ネパール愛鳥教育交流  
1990年10月11日～18日  
内容：キング・マヘンドラ・トラスト自然保護財団等の一行2名来日。  
東京での愛鳥教育交流会議。  
世田谷区立松が丘小学校視察。  
報告：日本鳥類保護連盟の報告書、  
「愛鳥教育No.35」

## 5. その他の行事・審査会への参加

- (1) 日本鳥類保護連盟主催  
第5回子ども鳥博士研修会指導  
1990年8月22日～25日  
場所：三宅島  
杉田、長屋常務理事が講師として参加。  
(2) 愛鳥週間ポスターコンクール及び  
全国野生生物保護実績発表大会審査会

1990年10月30日

- 東京NHK青山荘 会長参加。  
(3) 全国野生生物保護実績発表大会

1990年12月6日 環境庁  
会長参加。

- (4) 愛鳥週間功労者選考会  
1991年3月13日 東京NHK青山荘  
会長参加。

- (5) 日本鳥類保護連盟主催  
テグス回収と探鳥会  
1990年6月10日（日）

場所：多摩川関戸橋  
岡本常務理事参加

## III. 1990年度決算報告及び監査報告

岡本常務理事より〔資料2〕に基づいて、1990年度決算報告がなされました。

〔資料2〕1990年度収支決算報告

(1991年3月31日)

(単位：円)

### 収入の部

1 会費	219,000
2 売上	2,660
3 受取利息	579
4 寄付金	1,263,107
(日本鳥類保護連盟他より)	
5 前期(1989年度)繰り越し	
収支差額	△192,283
収入合計	1,293,063

### 支出の部

1 会誌発行費	797,220
2 通信運搬費	345,222
3 事務費	6,839
4 会議費	14,228
5 仕入	4,800
6 雑費	5,570
7 寄付金	110,000
(日本鳥類保護連盟へ)	
8 次期繰り越し	
収支差額	9,184
支出合計	1,293,063

引き続き、徳竹監事より〔資料3〕に基づいて、1990年度会計監査報告がなされました。

〔資料3〕1990年度監査報告  
前期繰り越し収支差額 △192,283  
当期収支差額 201,467  
次期繰り越し収支差額 9,184  
上記の通り報告します。

1991年3月31日

会長 江袋島吉 印

会計 岡本嶺子 印

監査の結果上記の通り相違ないことを認めます。

1991年5月18日

監事 渡辺研造 印

徳竹力男 印

#### IV. 1991年度事業計画案

平田常務理事より〔資料4〕に基づいて1991年度事業計画が提案され、了承されました。

〔資料4〕1991年度 事業計画

##### 1. 「愛鳥教育」の発行について

- (1) 37号(6月)、38号(9月)  
39号(12月)、40号(3月)
- (2) 内容

- ①愛鳥教育の考え方を再考する意味で論説のコーナーを作り、会員とともにこれからの愛鳥教育を考えていく場をしたい。
- ②愛鳥教育の実践的な活動の参考になるような講座を企画する。
- ③愛鳥教育にすぐに役立つような活動のヒントを紹介していく。
- ④愛鳥教育の参考になるような情報(書籍、雑誌、イベント、ビデオ等のAVソフト、愛鳥グッズ等の紹介)
- ⑤3月号(No.40)は、年報の含みを入れ、会員の活動の様子を紹介していただき(12月末日締切)、誌面の許す限り紹介していく。
- ⑥環境教育の紹介
- ⑦ その他

##### 2. 総会について

1991年5月18日(土) 東京港野鳥公園  
役員改選、総会終了後、「愛鳥教育の遠足のプログラム化」の発表、施設見学、探鳥会等の実施。

##### 3. 研修会について

期日：1991年8月6日(火)・7日(水)  
場所：北海道ウトナイ湖ユース・ホテル及び

サンクチュアリ、札幌市野幌森林公園  
内容：北海道支部会員の愛鳥活動の発表、愛鳥活動例の紹介、三浦二郎・金井郁夫両氏の講演、野外実習等。

##### 4. その他、行事・審査への参加

#### V. 役員選出について

平田常務理事より提案され、了承されました。  
新役員は、P.7の通り。

#### VI. 甲南第3小学校での愛鳥活動の紹介

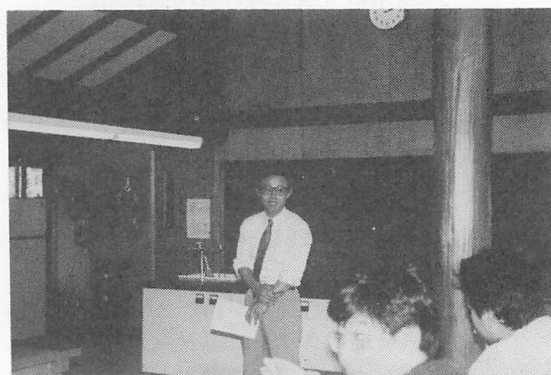
中嶋穰司先生が、滋賀県甲賀郡甲南町の甲南第3小学校からはるばるお出でくださいました。そこで、先生に甲南第3小学校での愛鳥活動について紹介していただきました。

甲南第3小学校は、全校児童130名余りの小規模校で、三方を山に囲まれ、一方に水田が開けた豊かな自然環境に恵まれています。小規模校の特色を生かし、ウグイス級というように身近な野鳥の名前を各学級につけて、マスコットの利用しています。そして、各学級の鳥についても調べることも大切な学習となっています。

5月17日に行われた「甲南第3小学校愛鳥のつどい」では、調べた各学級の鳥について発表したり、標語やポスターを製作したり、鑑賞したりしました。

昼休みには身近な鳥の鳴き声を放送して、意識づけをはかっています。また、年3回ほど縦割グループで学校周辺に野外観察に出かけ、野鳥や植物などを通して、自然と友達になれるように働きかけているとのことでした。

この他にもいろいろな活動が実践されているとのことでした。





# 全国愛鳥教育研究会新役員名簿(1991.5)

## 〔顧問〕

田村活三 TEL. 0423-81-6334  
〒184 東京都小金井市緑町4-17-21

## 〔会長〕

江袋島吉 TEL. 03-3421-1708  
〒154 東京都世田谷区上馬2-13-6

## 〔副会長〕

金井郁夫 TEL. 0426-23-2301  
〒192 東京都八王子市中野上町4-26-3

細谷賢明 TEL. 0857-84-3009  
〒689-03 鳥取県気高郡気高町大字殿473

## 〔常務理事〕

渥美守久 TEL. 0533-57-3405  
〒443-01 愛知県蒲郡市形原町佃49-2

岩淵成紀 TEL. 022-229-6078  
〒982 宮城県仙台市太白区八木山本町  
2-17-14 ファミリービル201

梅本 登 TEL. 0425-97-0231  
〒190-01 東京都西多摩郡日の出町平井915

岡本嶺子 TEL. 03-3465-8601  
〒150 東京都渋谷区宇田川町37-10-503  
麻仁ビル渋谷  
(財)日本鳥類保護連盟内

島田利子 TEL. 0463-88-5032  
〒259-13 神奈川県秦野市弥生町8-3

杉浦嘉男 TEL. 0427-35-1296  
〒194-01 東京都町田市真光寺町1485  
ハイツ福屋

杉田優児 TEL. 03-3708-2493  
〒157 東京都世田谷区鎌田2-15-9  
NDH143-101

長屋昌治 TEL. 0472-92-7420  
〒280-02 千葉県千葉市椎名崎町876-1  
おゆみ野11-46-3

原 一成 TEL. 0463-81-0035  
〒257 神奈川県秦野市本町2-4-4

平田寛重 TEL. 0463-96-5688  
〒259-11 神奈川県伊勢原市大住台3-7-19

## 〔監事〕

徳竹力男 TEL. 03-3895-3609  
〒116 東京都荒川区東尾久6-4-20

渡辺研造 TEL. 0543-52-1954  
〒424 静岡県清水市美濃輪町5-5

## 〔理事〕

風間源氏 (静岡県支部長) TEL. 054759-2822  
〒428-04 静岡県榛原郡本川根町藤川1120-2

柳沢信雄 (北海道支部長) TEL. 011-851-6364  
〒003 札幌市白石区栄通8-3-11

浅沼和男 TEL.  
〒150 東京都渋谷区恵比寿4-9-5  
マンションニユ-恵比寿401

柴田敏隆 TEL. 0468-51-1670  
〒238 神奈川県横須賀市平作5-3-20

武石千雄 TEL. 09737-2-2202  
〒879-44 大分県玖珠郡玖珠町塚脇東町426-10

千羽晋示 TEL. 03-727-0639  
〒145 東京都大田区上池台3-5-15

西村健一 TEL. 0546-35-3518  
〒426 静岡県藤枝市高岡3-11-11

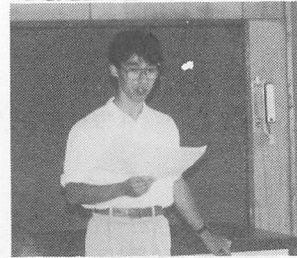
林 梅夫 TEL. 0766-69-8353  
〒939-13 富山県礪波市杉本1648

村口末広 TEL. 03-3412-3186  
〒154 東京都世田谷区太子堂5-32-17

柳沢紀夫 TEL. 0429-64-1568  
〒358 埼玉県入間市東町5-1-14

# 「環境教育を意識した遠足のモデルプラン—東京港野鳥公園をフィールドとして—」

横浜市立市ヶ尾小学校 堤 達俊



- 1.ねらい
- ・野鳥やそれらがすむ自然環境に関心を持つことができる。
  - ・野鳥や自然環境と、人間の関わりに気付くことができる。

## 2.展 開

時 間	児 童 の 活 動	指 導 上 の 留 意 点
8:30	○野鳥公園までのバス内で、野鳥や自然を題材にしたクイズを行う。	○児童が興味を持てるよう、その日に見られそうな野鳥や植物の紹介を行う。 ・動植物の絵や、野鳥の鳴き声テープなどを用意する。
10:00	○芝生広場に集合し、ネイチャーゲームを行う。 ・音いくつ ・マイクロハイク	○クラスごとに分散し、担任がリーダーとなり指導する。 ・野鳥の鳴き声や風の音に気付かせる。 ・小さな昆虫の存在に気付かせる。
10:20	○班を編成して野鳥観察を行う。 ・東観察広場（東淡水池） ・ネイチャーセンター（潮入りの池）	○担任や、レンジャー、シルバーボランティアの方々をリーダーとして班編成を行う（望遠鏡は、NCに約15台、東観察広場に約18台）。 ○淡水と汽水における見やすい野鳥を中心に観察する。 ○野鳥の種の識別にとどまらず、その生態にも目を向けさせる。 ○必要に応じてプリントを使用する。
11:30	○芝生広場にて昼食をとる。	
12:30	○芝生広場脇の水路、自然生態園、西淡水池において水中の生物や植物、野鳥の観察を行う。 ・箱眼鏡を使っての水中の観察 ・雑木林や水田・畑などでの野鳥（人里の鳥）の観察 ・西淡水池における水鳥の観察	○東淡水池や潮入りの池で見られた野鳥や植物との違いに気付かせる。 ・環境による生息生物の違い
13:10	○観察した生物の絵をかく。 ・いろいろな生物が共存する様子を描く	○淡水池や潮入りの池、畑や草原などの環境をえがいたプリントを事前に作成しておき、その用紙に、生物を書き込ませても良い。
13:45	○帰校準備	
14:00	○バス乗車	
15:30	○学校着	



### 3. 自然観察を遠足に取り入れる際の留意事項

#### A) 児童自ら取り組める観察方法

##### ○観察の視点を明示した“しおり”の例

- ・どんなふうにしてエサをとっているだろう。
  - ・いろいろな鳥のくちばしの絵を書こう。
  - ・気に入った鳥の絵とそのわけを書こう。
  - ・歩きながら次の物をさがしてみよう。
- (例：とがったもの、光っているもの、赤いもの、ぬけがら、鳥が食べると思うもの)

##### ○ネイチャーゲーム

- ・五感を使い、想像力を働かせる観察法
- ・自然との原体験を重視した、プログラム例も豊富な自然遊び。
- ・指導者に専門的な知識がいらない

※詳しくは、「ネイチャーゲーム」(ジョセフ・B・コーネル、柏書房)を参照。

##### ○ネイチャーオリエンテーリング

- ・決められたルートを歩き、自然に関する設問に答えながら地域の自然を理解する方法。
- ・視点をはっきりさせた観察ができる。
- ・児童の班行動による協力性、集団での行動力を育てられる。

※詳しくは、「横浜の自然を生かした理科教育の研究Ⅳ」(堤他、H2第二種研報告集、横浜市教育センター)を参照。

#### B) 複数のプログラムの使用

##### ○導入となる活動での工夫

- ・バスレクでの学習意欲の高揚を図る。
- ・五感を使って自然の雰囲気をつかませる。

##### ○中心となる活動での工夫

- ・その場の自然の素材を生かした工作をする。
- ・観察する環境を変える。
- ・観察する対象を変える。

##### ○まとめとなる活動での工夫

- ・作文(詩、短歌、俳句)をつくる。
- ・絵(印象に残った生物、自分との関わり)をかく。
- ・かるた作りをする。

#### C) 環境に対する配慮

##### ○自然環境に対する心がけ

- ・決められた道以外の歩行はしない。
- ・生物の過度な採集は避ける。

##### ○環境に対する心がけ

- ・レンジャーらの人手不足を理解する。
- ・他の入場者に迷惑をかけないようにする。
- ・望遠鏡等の施設備品を独占しない。

#### 【解説】

東京港野鳥公園は、東京港の城南島という埋め立て地にあり、242971.85㎡もの面積の海浜公園である。1年中、多くの人々がここを利用している。このたび、この東京港野鳥公園で研修会が行われるというので、都心からも近く、普段見慣れない水辺の鳥が豊富である点を生かして、学校遠足でこの公園を利用する場合のプログラムを考えてみた。

まず、ここまでの交通手段をバスと設定した。電車の混雑回避という点でもそうだが、バス内での指導ができる点も重視した。バス内では、野鳥公園でみられる生物の紹介をカセットテープや絵などで行う。最近では、テレビのあるバスも多いので、ビデオテープを使っても良いだろう。遠足の場合、野鳥観察は初めてという児童がいることも考えられるので、児童の実態に合わせて、双眼鏡の使い方や野鳥の探し方といった基本技術の指導を行う。

野鳥公園に到着したら、まずは、自然観察を行う準備や練習になる活動を取り入れたい。いきなり、子供たちを野外に連れ出し、「さあ、野鳥を見つけよう」と言っても、どこをどう探せば良いのかわからない子が多い。

そこで、ここでは、五感を使ったネイチャーゲームを利用してみた。野鳥を探すには、おもに、視覚と聴覚を使用する。そのため、耳を自然の柔らかな音(野鳥の声、風の音、木々のざわめき、虫の声)に慣らすために「音いくつ」を、小さな生き物を見つけられるような観察の仕方を学んだり、それによって自然観察への意欲を高めたりすることができることから「マイクロハイク」を選んできた。

「音いくつ」は、目を閉じて耳をすまし、いくつの音が聞こえるかを数えるゲームである。また、「マイクロハイク」は、1m位の糸を道と考え、草原に自分で置いた糸に沿って虫眼鏡で“観察旅行”を行うもので、腹ばいになってゆっくりとルーペを進ませると、今まで何もないように思えた草原にいろいろな生物がいることに気付くのである。

そのような活動の後、いよいよ野鳥観察へと入る。指導者は、教師を中心に考える。レンジャーやシルバーボランティアもいるが、時間や人数の面からあまり期待しない方がよい。午前中は、淡水池と汽水池の違った環境での観察を行う。水辺の鳥には大型のものも多く観察しやすいため、プリント等を使用して個人での観察を主に行う。サギ類やカモ類の生態や形態は、初心者にも楽しく観察ができるだろう。また、種の識別までできる児童については、汽水と淡水における生息種の違いについても観察させる。

昼食後は、自然生態園で水中の生物の観察などを行う。箱眼鏡等を使用するとおもしろい。また、淡水池でサギなどに食べられていた生物がここで見つけられれば、生物同士のつながりに興味をもたせられる。午前中は、野鳥中心に観察をしたが、午後は、このような他の生物の観察も取り入れて、自然の中に存在する生物の生活や彼らの関係にまで気付かせたい。水田や畑のあたりを歩けば、人里で見られる鳥も現れるだろう。学校付近の野鳥や、水辺の野鳥との違いもわかる。

まとめの活動としては、一日の観察を通して見つけられた生物の絵を描かせたい。その場合、一枚の絵にひとつの生物をかくのではなく、印象に残った生物をいくつか、生息環境とともに描かせる。そうすることによって、生物同士の関わりに興味を持たせられるかもしれない。また、人間の存在についても考えられる児童も出てくるかもしれない。

たった一日の活動で児童にそこまで期待するのは、難しいが、愛鳥教育は野鳥を通じた自然教育だという考えは教師側が常に頭に置いておく必要がある。

以上が、東京港野鳥公園での遠足プログラムである。今回のプランを作成するにあたって、私は、実際に野鳥公園を歩き、レンジャーの方にお話を伺ってみた。そこで聞いたところでは、今までにも遠足でここを訪れた学校があったが、その多くが、ネイチャーセンター内で児童に自由に観察させ、30分から1時間で、次の場所へとバスを急がせているとのことだった。そのような遠足もあるが、やはり教師がしっかりした計画を立てて遠足に臨んでもらいたい。また、公園側も現在のところ、業務の多忙や人材確保の面からだと思われる

が、学校遠足に対する受け入れ体制が不十分に感じた。確かに、一度に多くの子供たちを相手にするのは大変であるが、考えようによっては魅力も多い。遠足に対する体制を整えて、一つの重要な教育施設になるよう望む。また、そうすることができるよう、周辺団体や機関の援助もお願いしたい。

最後に、参考までに東京港野鳥公園に関する情報を記しておく。

#### ●交通案内

- ・JR浜松町駅から東京モノレールで流通センター下車、徒歩15分。
- ・JR大森駅東口、京急平和島駅から京浜島・昭和島・城南島循環の京浜急行バス(森24,25,32,36,平和32,54)で、「野鳥公園」下車。

#### ●開園時間

- ・午前9時～午後5時まで(11月から1月の間は午後4時30分まで)
- ・入園は閉園時間の30分前まで。

#### ●休園日

- ・毎週月曜日(その日が休日または都民の日に当る時は翌日が休園日)。
- ・年末年始(12月29日～1月3日)。

#### ●入園料

- ・一般は、個人200円、団体(=50人以上)160円。
- ・中学生は、個人100円、団体80円。
- ・小学生以下及び65才以上は無料。

#### ●公園案内、団体利用の申し込みは、

(財)東京港埠頭公社公園内管理事務所  
〒143東京都大田区東海3-1  
TEL.03-3799-5031～5032

#### ●その他の問い合わせ先は、

東京都港湾局開発部海上公園課  
TEL.03-3212-5111 内線35-351

#### ●参考文献

- ・東京港野鳥公園鳥ガイド(春/夏編)
- ・東京港野鳥公園鳥ガイド(秋/冬編)
- ・東京港野鳥公園ガイドマップ  
(いずれも入園の際に無料で配布される)
- ・(財)日本野鳥の会発行  
「野鳥」1991/1 特集「東京港野鳥公園」



# 野鳥公園に思う

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

ネイチャーセンターの視聴覚室で、この野鳥公園が完成するまでの様子を、スライドによって説明していただきました。それを見ながら、非常にお金がかかっていることを知りました。

より多くの種類の野鳥を呼ぶために多様な環境が整備され、そして、それらの環境を維持するために様々な工夫が凝らされていることにも、目を見張られました。

このように、充実した施設が整備され完成したことはすばらしいことですが、一方、素朴な疑問も持ちました。

一般人が自然と親しむために、果たしてこれほどのお金をかけなければならないのでしょうか。これだけの施設を用意しなければ、野鳥は来ないのでしょうか。

もちろん、この施設そのものが不要であるというわけではありません。しかし、振り返って考えてみれば、昔の東京湾には、人間が手を加えなくても自然のままたくさんの野鳥が訪れる天然の施設としての豊かな干潟がたくさんありました。何故、それをそっくりそのまま残しておかなかったのでしょうか。その季節になれば、たくさんのシギ・チドリの仲間や、その他多くの野鳥が見られ、お金や労力を今のようにかけなくても、豊かな自然とのつきあいができたはずです。人間は何という愚かなことをしているのでしょうか。豊かな自然を破壊しておきながら、今度は、たくさんのお金をかけて、もう一度それらを造りだそうとしているのですから。

この野鳥公園が造られ、現在のような姿にまで整備されるには、自然の大切さに気付いてもらおうとする多くの方々のご苦勞がありました。野鳥公園建設の歴史には、大切な意味があると思います。しかし、もし、学校教育の現場で、自然の大切さを伝える努力がなされ、その結果として、野鳥のために自然を残そうという意見が世論を左右するようになっていたならば、もっと違った展開が見られたかもしれませぬ。故山階芳麿日本鳥類保護連盟会長も、教育の力の大きさに期待するという言葉を終始おっしゃっていました。

これからの愛鳥活動では、野鳥や自然を大事にしようという心と、野鳥や自然のことを知ろうとする探求心を中心に据えていくことが肝要だと思います。

私たちが、学校現場で野鳥を誘致するための施設・環境を造ろうとする場合、この野鳥公園のそれは、おおいに参考になるように思います。それは、一つには、環境の多様性を実現することで、より多くの種を呼ぶことができるということです。また、環境の多様性を維持するためには、常に人間が手をかけていないと、それらは遷移していってしまい、環境としては単一化していってしまうということです。

教育のための施設には、スーパーマーケット的にいろいろ紹介するもの、専門店のようにその地域の代表的な自然環境を見せるもの、環境が移り変わっていく様子を見せるものなど、目的によっていろいろな形態のものが考えられますが、学校でふだん求められていることは、いろいろな野鳥に来てもらうことでしょう。そのためには、野鳥の衣食住を考え、多様な環境を備えた誘致施設を設計していく必要があります。規模としては格段の差がありますが、考え方は共通しています。

誘致施設については、(財)日本鳥類保護連盟、(財)日本野鳥の会、また、その関連のサンクチュアリなどに問い合わせると、レンジャーや担当者が相談にのってくれます。

なお、この野鳥公園では、春夏用と秋冬用の野鳥ミニ図鑑が無料で用意されています。一般のごく普通の環境であれば、利用できることも多いように思います。利用の価値があると思います。

〔見聞きした鳥〕

カルガモ、マガモ、コガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、オカヨシガモ、ズズガモ、カワウ、ダイサギ、コサギ、バン、オオバン、トウネン、イソシギ、キアシシギ、タシギ、コチドリ、ユリカモメ、ウミネコ、コアジサシ、オオヨシキリ、セッカ、イワツバメ、キジバト、カワラヒワ、ズズメ、ムクドリ、オナガ、ハシブトガラス

# 全国愛鳥教育研究会総会に参加して

秦野市立東小学校 原 一成

1991年度全国愛鳥教育研究会総会は5月18日(土)五月晴れの下、東京都大田区東京港野鳥公園で開催されました。

東京港野鳥公園は、様々な野鳥が飛来し、生活できるように淡水池、低・高茎草地、汽水池、干潟などいろいろな自然環境を人工的に設けてあります。また、園では、レンジャー(指導員)の活躍や双眼鏡の貸し出しがあり、ネイチャーセンターや観察小屋ではフィールドスコープが備えられています。その付近でよく見られる野鳥のイラストの展示があり、私のように野鳥の知識が無い者も興味深く観察できるように設備が充実しています。そのため、当日は老若男女を問わず、実に多くの来園者が、スコープごしに見える野鳥の愛らしい姿・しぐさに歓声をあげていました。

この野鳥公園は野鳥と人との歩み寄りを持たせてくれる絶好の場所と言ってもいいでしょう。

そんな野鳥公園をフィールドとして、総会後に発表された遠足のモデルプランはととても実践的で愛鳥教育研究会さながらの内容だと思いました。

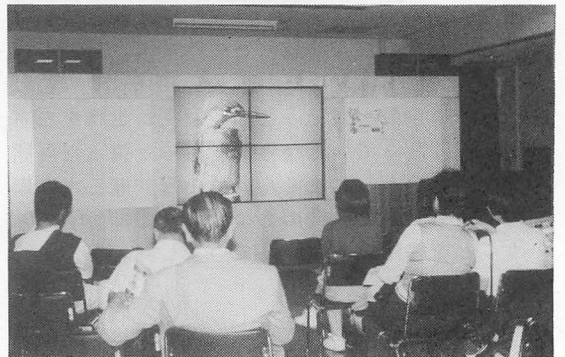
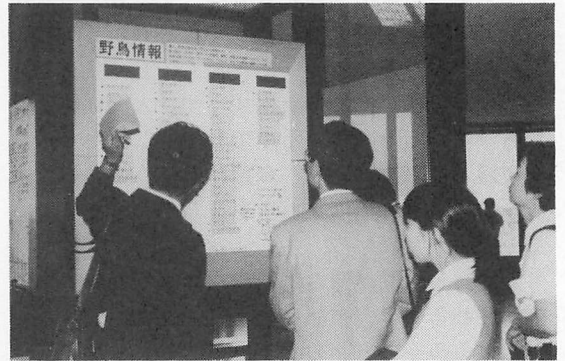
提案者の堤先生も野鳥公園の特色、施設をよく把握し、子どもたちが楽しみながら意欲的に臨めるようによく研究されていました。また、環境教育の視点からもとても参考になりました。

中でも、

- ① 往路の車中でバスレクを通して学習意欲の高揚を図る。
- ② 現地での導入段階として、ネイチャーゲームを通して、五感を使い、想像力を働かせながら、自然の雰囲気をつかませる。
- ③ 単調な自然観察(野鳥観察)で終始一貫するのではなく、多彩な表現活動を設ける。

以上3点については私には魅力的に感じました。何かの機会に私も実践してみたいと思います。

天候にも恵まれ、緑と心地よく駆け抜ける風につつまれた有意義な時間を過ごすことができました。今後も、各地の愛鳥教育に適した環境での実践の紹介を楽しみにしています。





# むらの理科ことはじめ(10)

## キマムシがいた

全国愛鳥教育研究会副会長 金井 郁夫

朝1時間目の授業に行くため廊下を歩いていると、後を追いかけてきた健一が「先生、キマムシつかまえたけど、いるか。」と尋ねた。「マムシならば、ありがたくいただくよ。」と手を差し出した。

健一は、カバンの中からふた付きのピンを取り出して「ほら。」と手渡してくれた。見るとこのあたりではキマムシとして恐れられているヘビである。ヘビ入りピンを持ったまま教室へと急いだ。ピンをテーブルの上に置いたとたんに裕が目を付け「何だ。」と近づく。そして「おっ、ヘビだ。ちっちゃなあ。」としてから、さらに顔を近寄せて、「ありゃっ、キマムシじゃねえか。あぶねえぞ。」とつぶやく。

それは無視して授業に取りかかる。そして開口一番、「今日はここにあるヘビの話から始めるかな。」として教室内を見まわす。「誰が持ってきたのよ。」と後の方からどなったのは元気のよい浩洋である。「このヘビは、裏高尾の健一が昨日採ったらしく、今朝もらったんだ。」と答える。そして「誰かこの名を知っている者はいないか。」と、ピンを高く見やすいように持ち上げて見せる。

「どれどれっ。」と前へ出てきた徳二がじっくりながめてから「こりゃあキマムシだ。マムシよりおっかねえというのは本当なのかよお。」と私に質問したのは進である。「では、このキマムシの正体を知らせるとするかな。」と、ピンのふたをはずし、ひょいとヘビの頭をつかもうとしたとたん、皆の表情が一瞬緊張。そして、おそるおそる「だいじょうぶか。」と言う者さえいる。

ヘビを持ったまま「マムシを見たことある者手を上げな。」と言って見まわすと、半数近い生徒が手を上げる。そこでさらに質問「マムシとはどんなヘビだ。」には、「ふとい」「こわい」「咬みつく」そして「銭型紋がある」と続く。さらに「頭が三角」あたりで意見は出つくしたらしい。

「そう、今皆の言ったことは全部正解だ。そこでこのヘビをよく見ろ。」と言いながら、頭と尾

を両手で持って教室内をまわる。「どうだ、このヘビとマムシをくらべてちがいを言ってみな。」に対しては「色がうすい」「細くてスマート。マムシはずんぐりしてる」。そしてキマムシとした徳二は「やっぱり銭型はあるぞ。」と発言する。どうやらこのあたりでは、銭型紋が毒蛇のシンボルマークになっているらしい。

ヘビをびんに戻し、ふたをしてから「このキマムシと呼ばれるヘビは、銭型の模様があることだけは毒蛇マムシと共通だが、他はまったく違う。そしてこいつの本名は、アオダイショウの子だ。」には数名から「うそだあ。」の声が上がる。「だいいち、うちの物置にいるでっけえアオダイショウは、緑色がかった茶色で縦に縞があるみてえで、こいつとはまったく似てねえぞ。」と不服そうに話したのは徳二である。

「青木の言うとおりのんだが、このアオダイショウを始めとしてシマヘビ、ジムグリあたりは親子で色や模様がだいぶ違うので、他のヘビと考えられることもあるんだ。」の説明には「へーえ、知らなかったなあ。だけどヤマッカガシの親子はよく似てんなあ。」は喜和。「そうなんだ。親にくらべると子の方が黄色やオレンジ色。そして黒もあざやかだな。それにヒバカリ、シロマダラ、タカチホヘビといったヘビも親子あんまりちがわねえなあ。」と結ぶ。

「さて話を元に戻してまとめると、アオダイショウの親はネズミや小鳥を餌にするから木登りの名人。だから家の中にも入りこんで人間をおどかすこともあるし、屋根裏へもぐりこんではスズメをねらうこともある。そしてキマムシと呼ばれながらまったく無毒の子どもさえ、ツバメのひなをねらって軒下や天井裏を這いまわるため、人と出会うことも多くなる、というわけなんだ。キマムシを怖がらないためにもしっかり見ておけよ。しばらくここへ置いとくからな。」で、キマムシ談議はチョンとなる。

## ファースト・レッスン ツバメ・ウォッチング

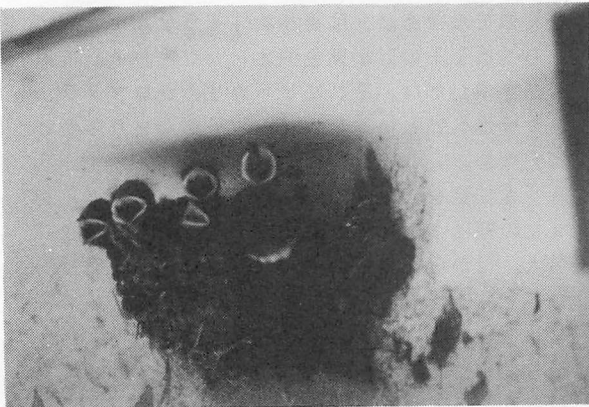
全国愛鳥教育研究会常務理事 島田 利子

3月、4月に日本にやって来るツバメは、私たちの身近な所でヒナを育て、初秋には、また、南の国へ旅立って行くというサイクルの中で、私たちに季節の移り変わりを感じさせてくれます。

「ファースト・レッスン」と銘打ったのは、ツバメは探鳥の第一歩（入門）として取り上げるのにふさわしい鳥だという意味と、ツバメは春の訪れと共に観察が始めることができ、継続観察ができる鳥だという二つの意味があります。

学校では、ツバメの到来を待っているかのように4月から新学期が始まります。身近に見られるツバメを題材に取り上げることによって、子どもたちに、野鳥との接し方、野鳥の見方、野鳥の形態や生態の調べ方などについて、効果的に指導を行うことができます。

私は、日頃の教育実践を通して、愛鳥教育の場では、「かわいい」、「きれい」、「すごい」といったような素朴な感動の声がとても大切だと感じています。それは、その感動が児童の活動を継続させることにつながるからです。そして、このことは、低学年ほど重要性を増すように思います。



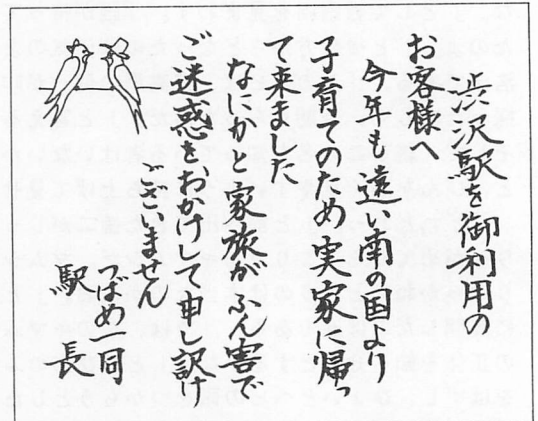
人家の軒下に巣を作り、人の目の届く所で巣材を集めたり、餌を採ったりして、街中を飛び交うツバメは、私たちにとってまさに身近な鳥であり、直接、手に取って見ることはできませんが、少し観察しようと努力すれば、その生活ぶりを目の当たりにすることができます。このことが、ツバメ

の教材としての価値を高めているのです。児童も、巣作りから抱卵、ひなの成長、巣立ちという一連のツバメ生活を継続観察していく中で、さまざまな生活ぶりや様子に感動していきます。

このようなツバメの教材性とその教育的意味を、教師である私たちはよく理解する必要があると思います。また、ツバメの生活を通して、児童が自然を理解し、自然や私たち人間の生活を見直すことができるように配慮していくことが求められていると思います。

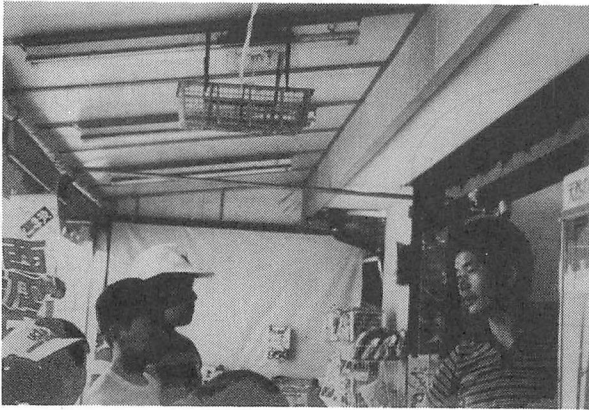
次に、私の「ツバメ・ウォッチング」の実践について報告をします。

神奈川県内を走る私鉄・小田急線に「渋沢」という駅があります。その駅の構内に、こんな看板を見かけました。それで、早速、愛鳥委員会の児童と一緒に、インタビューに行きました。



ツバメの気持ちになって、見守ってくれている駅員さん達の話聞き、とても嬉しく思い、子供達共々満足して帰ってきたことがありました。

別の話です。八百屋さんの家に厚手のビニールのひさしがあり、支え棒のところツバメが巣を作ったのですが、夏は温度が高くなるので、その八百屋のご主人は、ひさしの上に「よしず」をのせてあげました。さらに、お客さんの頭にふんが落ちないように、平たい籠をつるし、ふん集めの用具を作ってくれるということがありました。



ところが、昨年、そのひさしを電動式に変えたため、困った事が起きました。

5月22日、ツバメが巣作りの準備に取り掛かり始めました。朝、縮めてあるひさしの下側の支え棒のところに泥を付け始めていました。開店時間になったため、ひさしを伸ばしましたが、泥付けはその後も続きました。困ったのは八百屋さんです。どうしたものかとの問い合わせが私のところにありました。

それで、板を付けたりして、いろいろと工夫してみたのですが、やはりひさしの下に作り続けるばかりでした。そこで、形が出来た巣の上にキャベツの葉を乗せてみました。すると、はじめは近寄らなかったツバメですが、しばらくすると葉の上に巣を作り始めたのです。そこで店の主人は、キャベツの葉ごと巣を板の上に移し替えたのですが、その後、ツバメは来ません。主人もツバメは大事にしたいが、ひさしを伸ばしたままにもできない事情があって、大変困っていたのです。

また、ツバメが団地の5階に巣を作ったので、ふんが3階、2階の階段のすりに落ちてしまうのを、5階の家の人が毎日掃除をするという頭が下がるような例もありました。

反対に、人間の行為がツバメにとっては迷惑なこともあります。別の地域の話ですが、住民の依頼で、多くのイワツバメの巣が消防署のホースによる放水で落とされてしまうということがありました。あまりにもひどいということから、次の年には、消防署が板を取り付ける等、巣作りの補助をすることになったようですが。

このように、ツバメの巣を大切に思い、ツバメの育つことを楽しみにして、親ツバメの苦勞を心配したり、子ツバメが巣立つ時の喜びを自分の事

のように感じてくれる人々と触れ合うことができれば、そのことを通して児童の豊かな心を育てることができるのではないかと思います。温かい人情にふれる場を多く作り、人間性の豊かさを考えたいものだと思っています。

具体的には、インタビューに行ってみるのがよいと思います。場合によっては、それらのことに対して、子供達から感謝状を差し上げるようにするのも、心のふれあいの場が出来て良いと思います。



この他、ツバメに関してはまだまだ多くの話題がありますが、それはまさに、ツバメが人家やその周辺に巣を作り雛を育てるという行動をすることで、人間との接点が多いということによります。

これらの一連の流れをチャートにまとめてみましたので、ご覧ください(P16~17)。

学校教育の現場で愛鳥教育を進めていく時、「ファースト・レッスン ツバメ・ウォッチング」の成果は、いろいろな場面に現われてきます。

日常会話の中で、「先生！ツバメがね……」と話しかけてくれたり、日記や家庭学習の中にひともまでも登場したりすれば、記録としても残りますし、たいしたものだと思います。

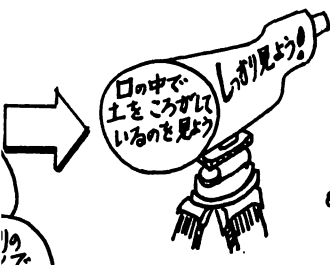
子どもたちが発見する喜びを、大切な「芽」として受け止め、育てていくことを考えていきたいと思っています。それが、次の活動の意欲を喚起し、セカンド・レッスンがいつそう楽しみなものにもなるからです。

これからも、これ以外にも教材化できる場面がないかどうか、通常の授業形態や学習の方法にとらわれずに、もう少し広い領域・分野で、地域の特性等も考慮に入れつつ、研究を進めていこうと考えています。



# ツバメ ウォッチングは、こんな所に!





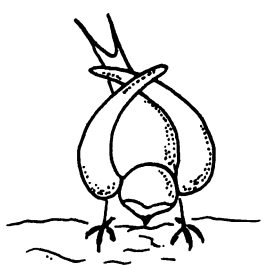
巣を作っている現場へ急ごう

巣作りしている様子をじっくり見よう  
(巣の近くで肉眼で見よう)

1時間位、じっと座っていると、せつせと巣作りしているのがよく見られる



→クラス単位で見るとは、  
声を出さない  
体を動かさない



**感動!**  
泥を口にくわえ、つけていくことを何回もやっていく様子は、すばらしい

Q. 何回位 運ぶのかな

A. 巣立ったあと数えるのもいいね

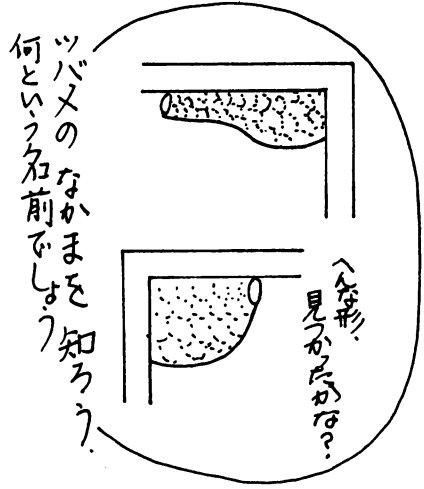
1000以上あるかな?



つくる所、つくらない所  
**ちがいは?**

巣がある所をさがしてみよう  
探検開始

インタビュに  
出かけよう  
GO



## 愛鳥教育がめざすもの

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

今号から論説を設け、愛鳥教育について、みなさんと一緒に考えていきたいと思えます。論説の内容や企画について、ご意見ご感想がございましたら、事務局までお寄せください。

第1回目は、私が担当します。上記の通り、非常に大きなテーマですが、あえて取り組んでみました。



私たち会員が、愛鳥教育に関心を持ち、何らかのかたちで携わっているのは、愛鳥教育に意義を感じ、子どもたちのこれからの人生や生活には愛鳥教育で培われるものが必要だからと考えているからです。

では、愛鳥教育とはどんな教育なのでしょう。どんな教育が愛鳥教育だと言えるのでしょうか。これについては、例えば、次のようなことが考えられます。

- ・自然について学習する一環として、野鳥について学習する。
- ・野鳥を窓口にして、野鳥と様々につながりのある自然を護っていこうとする考えを養う。
- ・野鳥との関わりを通して、自然とふれあう楽しさや豊かさを感じとらせる。
- ・野鳥の生活を見ることを通して、ヒトの生活を振り返り、私たちにとってくらしやすい環境について考えさせる。

これらに共通しているのは、対象が飼育用の飼い鳥や籠の中の野鳥ではなく、自然の中で毎日を生きているか死ぬかで一生懸命生きている野鳥である

ことです。そして、その野鳥の生活の観察を通して、自然そのものや人間の生活をも含めた環境の変化を見ていくことです。さらに、その活動で培われた感動や自然を見る目、社会を見る目が、結果として、生命系についての理解を生み、人と自然との一体感をもった自然保護の考えを養っていくということです。

実際の教育では、児童の発達段階を考慮しながら、野外での十分な自然接触の機会を持つことがその基本となります。そして、この自然接触ということについては、五感による直接的な体験を通しての感動や理解が大切です。もっとも、野鳥の場合、よほどの幸運に恵まれない限り、触ることはできません。しかし、触らなくても感動をわかちあうことはできます。

ビデオや写真といった、個人が直接関わることができないような代償体験では、私たちがねらうような感動は生まれません。しかし、望遠鏡を通して、いろいろなしぐさをする野鳥を見ることから始まる鳥への想いは、その後の、鳥と私たちの関係を深いものにしていきます。

とは言うものの、野鳥の観察だけで自然接触と言えるのかという素朴な疑問が生じます。しかし、実際には、心配には及ばないのです。

野鳥を丹念に見ていくと、鳥だけではおさまりにきれなくなってくるからです。例えば、木の実を食べているところを見てしまうと、それは何の木なのだろうか？ 魚を食べるカワセミを見れば、実際何の魚なのだろうか？ 干潟で見られるシギがおいしそうに食べているヒモのようなものは何なのか？ というふうに関心は広がっていきます。鳥たちの食生活から自然界のつながりが少しずつ見えてくるのです。

また、水辺で釣り糸に絡んだ鳥を見たり、畑のキャベツを荒らすヒヨドリを見たり、サギのコロニーの糞や臭いで困っていると、最近目立つようになってきた都市への野鳥の適応化の例などを知ること、ヒトと鳥との関わりを考える機会が出てきます。



このように、身近に見られる鳥に関心を持つことから、自然についての総合的な視野が開けていくのです。

自然接触の方法には、いろいろありますが、既成のものに左右されたり、過剰な期待をしたりしないことが大事です。自然と直接関わっていること自体が大事なのです。例えば、鳥や花の名前などにこだわることはありません。名前が分からなくても、その姿やしぐさに感動したりすれば、それはそれで十分なのです。大切なのは、一人一人がそれぞれに全身で自然を感じ、自然と一体になることです。

そのような気持ちで自然に接していくと、ころそのものが豊かになっていきます。これは、言葉で言えば、まさしく「探鳥」というイメージでしょう。バードウォッチングでも野鳥観察でもない世界です。

このような自然との楽しみ方を大切にしたいものだと思います。こうして培われたころの豊かさが、人にとっても過ごしやすい地球をつくっていくことにつながると考えるからです。

日本はその昔、と言っても、ほんの百数十年前までは、自然が豊かであり、鳥も獣も日本各地に豊富にいたことが書物などに記されています。トキやコウノトリ、ツルやガンの仲間が江戸の空を飛び交っていました。今から考えればうらやましい限りです。それほどの自然を維持してきた日本人は、黒船が来た時にも、やたらに鳥をあやめるアメリカ人に対して、鳥をはじめとする動物をむやみに殺さないことを日米和親条約の中につけ加えています。この頃の日本人の心の豊かさには見習うべきものがおおいにあると思います。

しかしながら、明治に入り、文明開化の声が高まって、何でも欧米にならおうとする傾向が強まると、日本人は、町の中に野生動物がいることを野蛮に思い、やたらに動物たちを狩猟するようになります。日本の野生生物にとって受難の時代がやってきてしまったのです。その名残が今でも、ハンターの存在によって受け継がれています。

一方、当の欧米では、工業化のために貴重な自然を壊している事実気づきはじめ、野生動物や自然の回復のために努力を惜しまずに取り組んできました。そして、まずまずの成果をあげてきています。

しかしながら、日本では、相変わらず、国民の

自然への関心の低さが、野生生物や自然の保護の進展にブレーキをかけています。そこを乗り越えない限り、私たちの生活に密着した自然とのつき合いは生まれては来ません。

欧米では、RSPBやオーデュボン協会のように、子ども時代からの愛鳥教育や環境教育に熱心に取り組むことで、その教えを受けた子どもたちが成人し、一市民として、自然に関心を持ち、保護活動に参加するようになり、さらに活動が充実するという成功例があります。

日本でも、今は亡き山階芳麿先生は、「こどもの時代からの愛鳥教育を通して、豊かな自然を残していこう。」と考えていらっしゃいました。

私たち全国愛鳥教育研究会でも、先ほど述べたように、江戸時代までの日本人が持っていた自然と触れ合える豊かなころや自然と親しみ自然を楽しむことのできる資質を持った成人が育つように活動を展開していきたいと考えています。

一方、自然接触に関する領域の内容は、基本的には、家庭で親から子へと伝えていく文化の中で継承されていくべきものです。

生命との関わり方、そして「死」との関わり方は家庭によってまちまちです。また、子どもの精神的な状況については、親が最もよく把握しているはずですが、従って、生命に関わる接触については、家族なり身内なりが指導していくのがよいと思います。

それから、鳥を見たり、自然と触れ合ったりというのは、あくまでも個人としての体験です。同行する人数が増えれば、それだけ個人が自然と触れ合う機会や時間は限られることになります。また、自然に対して与えるダメージも大きくなります。この意味からも、自然や野鳥を思いやるころを大切にするには、少人数がよいということになります。

しかし、現状では、このように自然を味わう人はあまり見られません。何かにこだわらずにはいられないような状況が存在しているとも考えられます。それらが、写真撮影であれ、珍鳥を追いかけ回すことであれ、道具や装備にこだわることであれ、個人の楽しみの範囲内であれば、まず、問題はないのですが、愛鳥教育の担っている本来の使命は、そういった単純なマニアをつくりだすことではないことを、改めて肝に命じておきたいと思います。

## 「OHPを使ったぬりえの指導」

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

愛鳥活動の初歩的な内容として、ぬりえを使った活動があります。学年なりに応じた活動ができ、殊に低学年には、関心が高いものの一つです。しかし、ぬりえを全員で一度にやろうとすると、図鑑が足りないなどの問題が起こってきます。大きめの紙に拡大してサンプルを作っても、普通のコピー機ではA3までという限界があり、少しばかり見にくい場合が出てきます。

そこで、OHPで拡大投影して、より大きな画面を見ながら、ぬりえを仕上げていく方法について説明したいと思います。

1. 目的：特に愛鳥教育の導入時の子どもたちに、身近な野鳥に関心を持たせるために行う。探鳥会の、事前指導や事後指導にも効果的かと思われる。
2. 場所：教室がやり易いでしょう。  
OHP用スクリーンが必要です。
3. 学年：やはり低学年が効果的です。
4. 展開：

教師がホーム・ルームなどの時間に野鳥の話をして、子どもたちに関心を持たせると、「先生、私の家のTVアンテナから黄色い模様の羽をした小さな鳥が飛んだよ。」などの話を子どもたちがしてきます。そのような時に、「じゃあ、みんなで、つばさの黄色い模様の鳥の（カワラヒワ）絵を描いてみよう。」と投げかけ、ぬりえの活動に入っていきます。また、「きょうは、鳥のぬりえを描くよ。つばさの黄色い鳥だよ。」というふうに教師側から投げかけていく方法もあります。

時期や環境によって、描く鳥の種類も変わってきます。初夏にジョウビタキは描けませんし、冬にツバメも描けません。気を付けましょう。また、校庭や学校の近くで見られ、フィールド・マークが目立ち、色は単色が多く（市販の20色前後の色鉛筆でまかなえる）塗り易い種を選ぶ必要があります。1年生で初めて行う時は、特に注意を要する点です。

セキレイの仲間やオナガ、ツバメ、冬羽のジョ

ウビタキなどは、やり易い種です。

### 5. 進め方

#### (1) 見本シートの作成

道具：トレーシングペーパー、筆記具（下書き用鉛筆、仕上げ用製図用ペン）、OHP用カラーペン、TPシート、コピー機械、野鳥図鑑（イラスト図鑑の方が描き易い）など



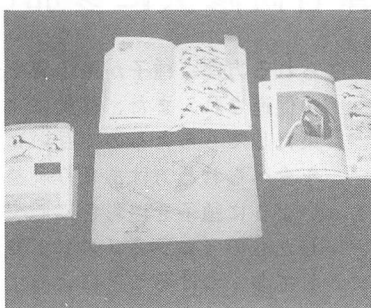
参考にする図鑑

①鳥の図鑑を見ながら、教材として適切な種（地域性、季節、色の塗り易さなど）を選びながら、見本になる絵を探して描きます。トレーシングペーパーは、オリジナルを描く時には使い易いです。鉛筆の線を消しゴムで消しても普通の紙のように跡が残りません。大きさは、後々のことを考えてB5の横型にします。この時、フィールド・マークがよく分かるポーズを探します。スタイルは横向き静止型が最初のうちはよいでしょう。オス・メスが異なる場合は2タイプ、また、飛型時によく目立つ模様が現れる種（カワラヒワなど）の場合は飛型も入れるとよいでしょう。ゴイサギのように成鳥幼鳥で異なる場合も二つのスタイルがあるとよく、このように考えていくと、ぬりえとして描き易いジョウビタキは、オス・メス、オスの飛型で1枚の中に3つのスタイルを描くようになります。少しレベル・アップしてきたら生態的なスタイルもいいですね（羽づくろい、採餌な

ど)。このようにして、下書きを描きますが、細かく描かずにおおざっぱな線で十分です。

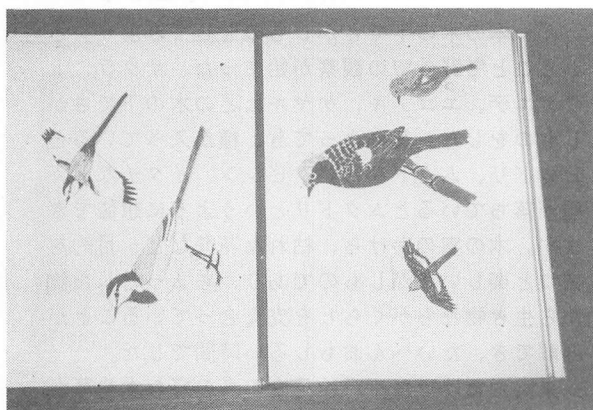
②下書きの上から製図用の1ミリ前後のペンで清書を描き、オリジナルシートにします。

そして、不要な線を消しゴムで消します。



オリジナルを仕上げる

③オリジナルシートからTPシート（A4に拡大）や上質紙（B5のまま）にコピーをとって、児童用に印刷したり、指導用見本のTPシートを作ったりします。



着色したTPシートの保存

④指導用のTPシートは、コピー機専用のTPシートにコピーしたものに彩色をします。しかし、TPシート用のカラーペンは色数が少ないので、トラペンに色が載る透明カラーペンを探さないと彩色が単純になってしまいます。筆者は、ホルベイン画材（TEL.03-3945-1815）のマクソソツインマーカーが120色という色の豊富さとTPシートでの色の載り具合、補充インクの用意、太書・細書がある点などで気に入っています。ただし、1本350円もしますので、文具店で色々と適当なものを探してみてください。（白色については、彩色せず、無色透明のまま使います。）

色塗りが面倒な場合はTPシートのカラーコピーなどという手もあります。富士ゼロックスやキャノンのサービスセンター、東急ハンズなどの店で1枚1000円ぐらいで作ってくれます。絵や

写真があれば、拡大縮小もでき、大きさを選ぶこともできます。TPシートの大きさはA5までです。

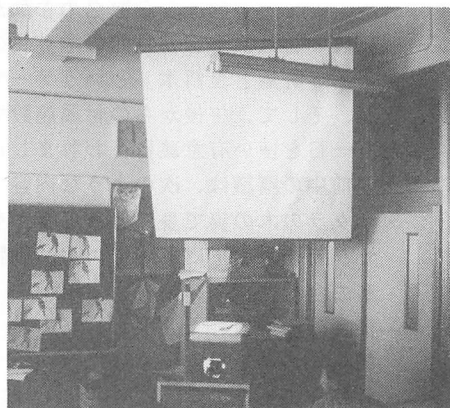
この指導用見本の絵と同じ絵柄のぬりえだと問題はないのですが、絵柄が異なると子どもたちがまどついて指導がしにくくなりますのでご注意ください。

## （2）児童への指導

道具：教師／OHP、見本シート、ぬりえ用紙

児童／色鉛筆

①彩色したTPシートをOHPに投影し、それを見ながら子どもたちが色をぬっていきます。色鉛筆にない色もでてきますが、その辺のところは



OHPでの投影

柔軟に対処してください。色鉛筆にある色でまかなえる鳥を選ぶことも、初期の段階では必要です。

普通は本やパンフレットの絵を見て描きますが、OHPを使うと1枚のシートで一度に一教室分対応することができ、初期の指導としてはとてもやり易く失敗が少なく済みます。児童の作品にも上手なものが多いものです。

②塗り終わったぬりえは教室や廊下などに展示して、野鳥の普及啓蒙を図ります。その時に、「この絵の鳥を見たら教えてね。」とか、「この鳥、見たらニュースにしてね。」などと声をかけておくと、その後の野鳥新聞作りや野鳥ニュースなどの活動にも広がり期待できます。

③この時に作ったオリジナルシートを使って、カレンダーや指導用紙芝居・展示用パネル（B4に拡大）などに利用して指導に生かすことができます。また、オリジナルシートやカレンダーの原稿や彩色したTPシートなどは、B5やB4のクリアファイルに入れて整理しておく、利用がスムーズになります。



## 神奈川県愛鳥モデル校指導者研修会に参加して

神奈川県秦野市立南小学校 谷 淳司

5月27日、神奈川県愛鳥モデル校関係の指導者研修会が厚木市の神奈川県立自然保護センターで行われました。

この研修会は、神奈川県が小・中・高の愛鳥モデル校に指定している各校の担当者を招いて行われたもので、今回は30数名の参加がありました。

研修内容は、平塚博物館の学芸員の浜口哲一氏による「野鳥と食餌木」というテーマで午前中の講義、そして、午後からの付属施設での野外実習と丸一日を使い有意義に行われました。

午前中の講義は、次のような内容でした。

- ・サクラの木の実で鳥にとって食べやすい点。
- ・サクラの木の下に落ちている、動物の食べあと。
- ・鳥の食性。
- ・果実、種子食とくちばし。
- ・果実食の鳥と果実。
- ・種子食の鳥と果実。
- ・野鳥誘致と植物の植栽。

果実、種子食とくちばしについてははなしは興味深い内容だったので少し紹介しておきます。鳥には、果肉を食べるもの（ヒヨドリ、ムクドリなど）、種子を食べるもの（カラ類、シメやイカルなど）があり、食べられる植物の側も果肉を食べ

られる方は、種子が鳥の胃を通ることにより発芽が促進され、また、移動により種子散布の役目も果たしてもらえるので互いに利益があるが、種子を食べられる方はあまり利益はなく、食べられないように種子を迷彩色にして目につかないようにしたもの（カラスノエンドウ）や、種子を小さくして多くつけることによって、食べられる分を見込んだもの（イネ科）など、木と鳥は生き物としての歴史の中で互いのつながりが形として残され進化してきているということなどを、講義と実習を通して学ぶことができました。

神奈川県秦野市立西小学校 小山ひより

「一本の木の下でさがしものをしてみよう」ということで野外での観察が始まった。サクラ、トウカエデ、エゴノキ、ケヤキなどの木の下でさがしものをした。糞によっても、種が入っているとヒヨドリ、ムクドリ、ハクビシン、イタチなど、種が落ちているとムクドリというように想像できます。木の実のかけら、枯れた花卉など、目的を持つと楽しいさがしものであり、ちょっとした物から生き物たちがぐらしを支え合っていることが理解でき、たいへんおもしろい時間でした。

果実食だけでなく、種子食の鳥の好む木や草も増やし、自然にさらにやさしい目を向けていこうという気になった一日でした。



# インフォメーション(関連団体・雑誌)

全国愛鳥教育研究会常務理事 杉浦 嘉雄

## ●愛鳥教育・環境教育関連団体紹介コーナー

財団法人日本野鳥の会 (Wild Bird Society of Japan) 1934創立、会長 黒田長久、会員数3万人の日本最大の保護団体。全国に72の支部があり、毎週のように全国各地で探鳥会を開くなど、地域における愛鳥教育に貢献している。これら普及啓発事業とともに、野鳥保護のための調査研究活動の実施、野鳥のための聖域“サンクチュアリ”の建設にも力を注いでいる。会報誌「野鳥」を毎月発行している。会員についての問い合わせは以下の通り。

〒150 東京都渋谷区渋谷1-1-4青山777ビル5F  
TEL. 03(3406)7141 郵便振替番号：東京4-98389

## ●愛鳥教育・環境教育関係雑誌紹介コーナー

今回は、財団法人日本野鳥の会発行「野鳥」の最近の号から、特に愛鳥教育に活用しやすい特集をピックアップしてみる。

### ・1989/10 特集「地球環境と野鳥」

石弘之氏の「地球環境とバードウォッチャー」とその座談会は、普段私たちが行っているバードウォッチングと地球環境の問題がいかに密接なものであるかを気づかせてくれる。

また、ののたんぼ氏による「バードウォッチングは地球を救う！」の見開きカラー頁は、小学生にも分かりやすい素晴らしい教材といえよう。

### ・1989/12 特集「カモの行動学」

身近な冬鳥の代表選手カモの仲間についてのディスプレイの特徴、その他の豆知識などが分かりやすくまとめている。特に、福田道雄氏構成、谷口高司氏イラストによる「マガモの雄の求愛行動」の見開きカラー頁は、カモの観察には欠かせない情報といえよう。

### ・1990/11 特集「児童文学と鳥」

国松俊英氏の「日本における現代児童文学の野鳥を楽しむ」は、戦後の児童文学の中で野鳥を題材にした作品の個々の解説や全容についても分かりやすく解説しており、その一覧表は購入図書への参考にもなる。

### ・1991/3 特集「鳥の図鑑」

海外の野鳥の図鑑がカラー写真で数多く紹介されており、日本の野鳥の主な図鑑も紹介している。特に、海外の図鑑に見られるくちばしの識別写真や一種に関するいろいろなポーズのスケッチなど、バラエティーに富んだ視点は子供たちの観察の際にも役に立つであろう。

### ・1991/4 特集「シジュウカラ」

身近な野鳥の代表選手シジュウカラについての四季の行動の特徴、その他の豆知識、緑との関係などが分かりやすくまとめている。シジュウカラの巣箱の作成、架設、観察には欠かせない情報といえよう。

### ・1991/5 特集「バードウォッチング入門」

野鳥観察の方法を物語風に分かりやすく書いてある。特に、バードウォッチング図鑑春夏編4頁は、1991/3で特集された海外の図鑑に見られる一種に関するいろいろなポーズのスケッチの特徴を生かした日本版の身近なミニ野鳥図鑑。小学生にも分かりやすい素晴らしい教材といえよう。

# インフォメーション(BOOKS & VIDEO)

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

## ●都市鳥関係についての文献

都市部での愛鳥活動の活性化のために、最近話題の都市鳥の行動に焦点を絞って調査等の活動をするのはいかがでしょうか。

調査のしやすいツバメをはじめ、すっかり都市鳥の座を築いたヒヨドリやキジバト。最近では、コゲラ、アオゲラ、ツミ、チョウゲンボウ。ゆくゆくはイソヒヨドリやハヤブサなどの可能性もあり、これからおもしろくなっていく分野です。特に生態的なことにポイントをおくとアマチュアならではの研究ができるかと思います。なお、都市鳥研究会という研究団体がありますので、関心のある方は連絡をしてみたいかがでしょうか。  
(都市鳥研究会事務局 TEL.0484-62-7141)

### 【児童向け】

- 唐沢孝一 カラスがまちにすんでいる(かがくのとも260) 福音館 1990  
" おかえりなさいツバメたち 大日本図書 1986  
" コンクリートジャングルのカラスたち " 1988  
" がんばれ赤スズメ " 1989

### 【一般向け】

- 唐沢孝一 マン・ウォッチングする都会の鳥たち 草思社 1987  
" カラスはどれほど賢いか 中央公論社 1988  
" スズメのお宿は街のなか " 1989  
" ネオン街に眠る鳥たち一夜鳥生態学入門- 朝日新聞社 1991  
都市鳥研究会 都市に生きる野鳥の生態 都市鳥研究会 1988

## ●野鳥、自然観察、環境問題についての文献

### (1) 野鳥関係

#### 《入門書》

- 松田道生 バード・ウォッチング入門(コミック) 山と溪谷社 980 1991

#### 《図鑑》

##### 【一般向け】

- 叶内拓哉・浜口哲一 野鳥(写真図鑑) 山と溪谷社 2400 1991

##### 【児童向け】

- 水野文夫・長谷川博 とり(ふしぎがわかる自然図鑑) フレール館 2000 1991

#### 《給餌関係》

- 柚木修・陽子 野鳥を呼ぶ庭づくり 千早書房 1200 1990

### (2) 自然観察

#### 【児童向け】

- 浜口哲一 自然といっしょに遊ぼう 全5巻 学研 15000 1991  
柴田敏隆 公園でできる身近な自然観察 全7巻 文研出版 19800 1991  
" 野生動物を調べよう 全10巻 福武書店 22000 1991

### (3) 環境問題

#### 【児童向け】

- 地球の健康診断 全5巻 草土文化 10000 1990  
地球環境と私たちの暮らし 全5巻 学研 15000  
私たちの地球を守ろう 全8巻 偕成社 29600  
地球の環境問題 全7巻 ポプラ社 19950



みんなと考える人間と地球の環境 全6巻

星の環社 15000

世界はいま・・・自然環境編 全8巻

佑学社 9888

図説・私たちと環境 全12巻

旺文社 24720

水野 玲 地球子どもたちへの環境パスポート

ほんの木 500 1990

アースワークスグループ編 子どもたちが地球を救う50

の方法 ブロンズ新社 1200 1990

### ●野鳥関係のビデオテープ

J I C C出版局：ビデオ野鳥観察図鑑VHSのみ

各15分各1950円全12巻 1990

編集すると少し画像は落ちるが、この値段はありがたい。また、15分という時間も好都合です。

1. イヌワシ、オオワシ、オジロワシ
2. キツツキ、フクロウ、カッコウ
3. ヤマセミ、カワセミ、カワガラス
4. ツル、ハクチョウ、ガン
5. オシドリ、オナガガモ、カイツブリ
6. タカ、ハヤブサ、トビ
7. カラス、オナガ、モズ
8. ツバメ、ヒバリ、スズメ
9. ウミウ、アビ、ウミガラス
10. アホウドリ、カツオドリ、ウミツバメ
11. 干潟の鳥たちウォッチング編
12. 珍しい鳥たちウォッチング編

そのまま見ても結構ですが、

理科（野鳥の季節ごよみ）

国語（「大造じいさんとガン」にてくるガンやハヤブサのイメージ化）

音楽（きつつきとみみずく、もりのフクロウ等の唱歌、白鳥の湖などの鑑賞などでのイメージ化）

図工（鳥を題材にしたポスター、レリーフ、彫塑などの製作時におけるイメージ化）

などの学習に必要なところを編集して、オリジナル教材テープを作るのもよいでしょう。そうすると、学習の理解はもちろん、自然への視野も広がってきます。ローカル的な話も加えれば、郷土への関心も高まるといった学習効果も期待できます。

## 1991年 夏期研修会のご案内

期日：1991年8月6日（火）・7日（水）

現地集合解散

場所：苫小牧市ウトナイ湖ユース・ホテル

(TEL.0144-58-2153)

及びウトナイ湖サンクチュアリ、

札幌市野幌森林公園

会費：10,000円

(1泊2食、バス代、保険料、資料代他)

日程：

《8月6日（火）》

12:30 受付

13:00 室内研修会

愛鳥活動の紹介（北海道支部）

①厚床小学校 ②藤の沢小学校

③いしやま中央幼稚園

愛鳥活動の教育課程での取り組み

愛鳥活動のヒント

1. 野鳥マップを作ろうよ

2. バード・ボードを使って

3. 観察カードの利用

講演：三浦二郎氏

16:30 ウトナイ湖サンクチュアリの見学

(大畑孝二チーフレンジャーの案内)

17:30 風呂、夕食、休憩

19:30 ディスカッション「レベルアップ愛鳥活動」

21:00 懇親会

《8月7日（水）》

5:30 探鳥会

8:30 野幌森林公園

10:00 探鳥会、野外実習ワークショップのいろいろ

13:00 講演：金井郁夫氏

14:00 閉会式

### ●申込方法：

現金書留または郵便振替で、申込金5,000円を添えて、下記の宛先へ、7/15（月）までにお申し込み下さい。

全国愛鳥教育研究会事務局

〒150 東京都渋谷区宇田川町37-10-503

(財)日本鳥類保護連盟内 担当：岡本

TEL.03-3465-8601

郵便振替 東京8-12442 全国愛鳥教育研究会

## 表紙の紹介

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

この号から、No. 8 以来踏襲してきた表紙のデザインを変えてみましたが、いかがでしたか。鳥と自然と子どもたちの雰囲気がやわらかい感じで表現できたように思います。デザインは、島田常務理事の知人である小泉和江さんにお願ひしました。

### 「嬉しい春」

小泉和江

四十年程経つコブシの高木が庭にある。花の季節には、優しい春の空がその白い花にとてもよく似合う。夜、見上げれば、まるで鳩の群れが体を休めているようで印象的だ。

「嬉しいね」と鳴く鳥がいると言っていた母を思い出すのも春。母の心情を思いやると私も嬉しくなる。

## 事務局日誌

全国愛鳥教育研究会常務理事 岡本 嶺子

4/12 (金)

常務理事会 7名参加 渋谷 J A P B

5/12 (日)

第45回全国野鳥保護のつどい 会長参加  
岡山県吉備高原建部家族旅行村  
「たけべの森」

5/18 (土)

全国愛鳥教育研究会総会  
総会 12名参加  
野鳥公園の見学及びバード・ウォッチング  
24名参加 東京港野鳥公園

5/31 (金)

常務理事会 5名参加 渋谷 J A P B

## 「愛鳥教育」バックナンバーの紹介

会員の方々にバックナンバーの紹介をしたいと思います。今回は、特に、イギリス R S P B のプロジェクトガイドの掲載号を取り揃えてみましたので、テーマを見て、ご入り用の方は、全国愛鳥教育研究会事務局までご連絡ください。

鳥の飛翔	: NO. 23
鳥の渡り	: NO. 24
鳥と図画工作	: NO. 27
学校のできる野鳥の研究	: NO. 28
学校のできる野鳥の研究(続)	: NO. 29/30
学校のできる野鳥の研究(続々)	: NO. 31
鳥と算数	: NO. 32
鳥と算数(続)	: NO. 33
野鳥の行動	: NO. 34
鳥類保護と保全	: NO. 36

NO. 27、36は1部1000円、他は1部500円でおわけしています。

送料は、実費です。事務局までお問い合わせ下さい。

## 編集後記

表紙のレイアウト、カラーも一新しました。内容も新しい企画を取り入れました。

会員の方々が待ち望むような誌面にしていきたいと思っています。ご意見ご感想をおよせください。  
(KANJUH)

今年、渋谷の事務所の前の電柱にハシブトガラスが巣をかけ、卵を温めているのをみつけたのは5月中ごろだったと思います。灰色の1羽の雛をかえしたのを見たのは6/5でした。

都会の真ん中では巣作りをすることもままならないらしく、車の往来も激しいこんな所にとってものです。

もう今では(6/12)羽も黒く生えそろい、巢の中で動いているのが見られますが、巣立ちにはもう少し日数がかかるようです。それでも、羽をバタバタさせたり、一人前?に羽づくろいしているのをみると(6/14)、もう間もなくかしらとも思います。

もう一つ、やはり事務所の裏手にある民家のヒマラヤスギに、このところ毎年のように巣をかけるハシブトガラスがいるのですが、今年は巣作りだけで雛をかえずところまではいかなかったようです。ヒマラヤスギの葉が茂っていて、十分に確認ができないのが残念です。(岡本)

35号から、パソコンのワープロソフトとレーザープリンターを使って本文の版下を作成するようにしています。タイトルや写真は印刷業者に任せていますが。ちなみに、使用している機種は、NECのPC-9801です。

最近、ワープロを使って原稿を書かれる方が増えていますので、そういう方には、フロッピーディスクの形で原稿を送っていただいています。

編集者としては、完成までの時間と手間がかかるのが難点ですが、原稿に手を入れる作業や校正作業に要する負担や自由度の面では、従来よりも向上したように思います。

まだまだ、技術的にも未熟ですが、見やすい紙面構成や内容構成について研究していこうと考えております。皆様の御意見をお待ちしております。  
(杉田)

## 「愛鳥教育」No.40の会員からの活動記録の投稿についてのお知らせ

### 全国愛鳥教育研究会事務局

総会の事業計画でも触れましたが、「愛鳥教育No.40」の会員からの活動記録の投稿についてお知らせします。

この企画の趣旨は、会員による愛鳥教育活動とその実践の様子を広く紹介することにより、会員同士の研究推進と交流、そして全国愛鳥教育研究会の活動の活性化を図ることです。

具体的内容としては、愛鳥活動の実践記録を主体に考えています。学校全体の活動をはじめとして、学年・クラス・クラブ、または、国語や生活科の授業としての取り組みなど、いろいろ考えられます。その他、学校だけでなく、幼稚園や公民館、子供会や自治会などでの活動もあったらユニークなものができあがると思います。小さな活動でも結構です。継続すれば力になります。また、みんなと手をつなぐことも力になります。奮ってご投稿ください。

締切は本年12月末日までということにします。送り先は全国愛鳥教育研究会事務局です。不明な点は、事務局までご連絡ください。

### 愛鳥教育 No.37

1991年6月30日

発行人	江袋島吉
発行所	全国愛鳥教育研究会
住所	〒150 東京都渋谷区宇田川町37-10 麻仁ビル渋谷503 (財)日本鳥類保護連盟内
電話	03-3465-8601
会費	3,000円
郵便振替	東京8-12442
印刷所	祐文社



## 愛鳥クイズ

今号から、愛鳥活動の参考にと思い、クイズのコーナーを設けました。会員の方からの出題も歓迎しますからどしどしご応募ください。

今回は、モノクロ・バードクイズです。日本産野鳥の中には、黒と白の部分がポイントになる野鳥が数種類います。下記の4枚の絵の野鳥の種類を考えましょう。

正解は次号に掲載します。

